



信念が、世の中を変えていく。「One's Way」でいこう。

iSM X

言葉をつなぐ

撮影 / 戎谷康宏

日本語という種を蒔き、異国とのつながりを育む挑戦

「学びたい」という欲求は、やがて「成し遂げたい」という挑戦心へと変わる。そして、本人の主体性や行動力を重んじるほど必要になるのが、枠や壁を取り払った成長のステージである。これは、学校も企業も同じではないだろうか。

帝京大学には、八王子キャンパスの学生を対象とした「学生チャレンジ制度」がある。学生自らがプロジェクトを企画・立案し、学内選考を経て承認されると活動助成金が支給される。2015年度に導入して以来、社会に貢献する数々のプランが実行に移されている。

その一つが、今回ご紹介する「Xin chào!（こんにちは）」にほんプロジェクトだ。活動の目的は、ベトナムの子どもたちに向けた「日本語テキスト作成」にある。今年の7月、三カ年計画でスタートした。初年度は現地の実態調査や教材理解、次年度は追加調査やテキスト試作、そして、最後の年に完成をめざす。

メンバーは13人。教育学部をはじめとした4学部から有志が集う、学部横断プロジェクトである。立ち上げの経緯について、リーダーを務める柴山正州さん（教育学部4年）に尋ねた。

「きっかけは、ベトナムで日本語教室を開いている教員からの相談でした。子ども向けに特化した教材がなくて困っていると、教員やゼミを介して耳にしたのです。背景には、ベトナムにおける日本への高い注目度があり、日本語を第一外国語として教える小学校も増えています。一方で、教材は手探りで作られており、正しい日本語教育を行えない状況にあります。そこで、教員の指導力に依存しなくても理解が進むテキストを作成しようと思ってきました」

活動内容は大きく二つある。一つは、ベトナムでの現地調査だ。今年の夏休みに実施され、約1週間で3カ所を訪れている。きっかけとなったベトナムの日本語教室や、児童向けインターナショナルスクールでは、指導の実態を視察。また、ベトナム教育省で小学校用教科書

作りに携わる日本語専門家との意見交換を行った。もう一人のリーダーである守屋流詩亜さん（教育学部4年）に感想を聞いた。

「現地に行ってみると感じたのは、子ども向けの十分な教材がない中、試行錯誤しながら日本語教育を行っているという事実です。日本人だからこそ貢献できることがあるはず。懸け橋になりたいと強く思いました」

もう一つの活動は、日本での調査である。その対象として学生たちが注目したのは、在日ベトナム人をはじめ、多国籍の住民が暮らす神奈川県横浜市の「県営いちよう団地」。近隣の小学校にコンタクトをとり、日本における日本語教育の現状や学習環境を把握しようという計画を進めている。

道のりは始まったばかりだが、奔走する学生たちには熱いiSM（イズム）がある。言葉は、人と人をつなげる種。一粒でも多く蒔き、ベトナムと日本で開花させていきたい。作成したテキストで学んだ子どもたちの中で、日本への愛着が膨らみ、いつか日本とベトナムの懸け橋になる。それが、このプロジェクトの先にある願いである。



今年9月にベトナム・ハノイ市内で現地調査を実施した学生たち。「ゲートウェイ国際小学校（写真左）」では、児童が日本語クラスで授業を受ける様子を視察。「独立行政法人国際交流基金 ベトナム日本文化交流センター（写真右）」では、ベトナム政府の教科書作りの現状を日本語専門家に聞き、テキスト作成にあたっての助言を得た。

 帝京大学

本部広報課 TEL.03-3964-4162
〒173-8605 東京都板橋区加賀2-11-1 <http://www.teikyo-u.ac.jp/>